

校則から見るグローバル化

3年1組27番 水野海実

3年1組34番 綿野紫月

3年1組20番 堤絵里紗

Keyword: 「グローバル化」「校則」「国際高校」「教師と生徒」「意識改革」

1. はじめに

私たちが「校則から見るグローバル化」というテーマを選んだのは、それぞれの経験や気づきから日本の校則に疑問を持ったことがきっかけである。海外での学校生活の話の聞いたり、実際に体験したりする中で、日本よりも個性や自由を尊重する校則に触れた。その一方で、日本の学校では女子はズボンかスカートを選べるのに、男子は選べないなど、まだ制限が残っている。また、学校生活で「グローバル」や「国際性」という言葉をよく耳にするが、その本当の意味は漠然としていたと感じた。異なる価値観や多様な考え方を理解し、尊重することの重要性に気づいたことも、探究を始める大きなきっかけであった。それぞれの経験や疑問が重なり合い、「校則」という身近なテーマを手がかりに、日本の教育における多様性と自由のあり方、そして「真のグローバル化」について考えることが、私たちの探究の出発点となった。

2. 序論

私たちの通うこの国際高校は基本的に登美ヶ丘高校時代の校則を採用している。しかし、校風や方針が変わった今、それに伴い積極的に校則も新しいことにチャレンジしていくべきではないのだろうか。そこで、まずそういった事例が過去に存在していないのか調べてみた。

朝日新聞の沖縄タイムス2024年2月22日の記事によると、沖縄県立球陽高校の授業で、「校則により生徒の個性が失われているのではないかと議論されたことをきっかけに、試しに校則を1ヶ月廃止してみる取り組みが行われた。教員陣は、校則排除に伴い実際にどのような変化があるのかという検証に前向きな姿勢を見せていた。また、生徒側もどのような課題が発見され、どのように対策していくのか、良い意識改革になると考えている。チームの指導に当たる川端俊一教諭は「教員たちからは心配の声もあったが、やってみないと分からないこと。生徒が自分たちの権利やそれを考える原動力になると思う」と話す。また、探究活動を主導する中村元紀教諭は「取り組みをきっかけに教員の意識も変わる。生徒と教員のコミュニケーションの幅が広がると思う」と期待した。

この事例から、近年グローバル化が進む背景も踏まえて私たちは校則は常に時代に合わせて変化していく必要があると考えた。しかし、それには生徒一人ひとりの責任に対する意識も大切だという現状がみえた。そこで、探究のはじめにまず生徒と教師の校則に対する意識調査として、アンケートを取ることにした。

3. 本論

〈考察〉

私たちは、3人のそれぞれの留学経験や他国への訪問をきっかけに、国際高校の“真のグローバルな人材育成を目指す”在り方に疑問を持った。アンケート調査開始前に、グローバルとは一体どういったことなのかを明確にする必要性を感じた。日本と海外の校風や校則の違いについて、実体験を踏まえて改めてまとめることにした。私たちはそれぞれ、ドイツ、イタリア、そして修学旅行で韓国に行ったことで明らかになった、国際高校との違いを以下に記す。

1. イタリア

服装や髪型に関する厳しい規定はほとんどなく、私服登校が一般的である。生徒の個性や自己表現を尊重する文化が根付いている。

2. ドイツ

学校も制服がなく、自由な服装が基本である。特徴的なのは、校則を生徒と教師が協議して決める点であり、生徒会が校則改定を提案することもある。このような民主的な運営は「自分たちの学校を自分たちで作る」という主体性を育てている。

3. 韓国

日本と似た厳しい校則文化を持つが、近年では髪型や服装の自由を求める声が高まり、校則の緩和が進みつつある。実際に、修学旅行での交流先であるセジョン国際高校では、制服はあるがその着方は自由であり日本ほど厳しくない。

私たち国際学校は、世界中の留学生を受け入れておりその数も多数である。そこで、彼らにも日本で生活をする上で、自国とのどのような違いや疑問が生まれたかについてのインタビューを行った。このインタビューを通して、上記の3カ国にとらわれない各国の学校の校則について知ることができると考えたからだ。結果は以下の通りだ。

- 自国では、掃除の時間は取られておらず清掃業者の方が掃除をしてくれている。だが、放課後に生徒が掃除をしている。
- 自国では、1人1人責任を持つことを意識して過ごしており、日頃から意識をすることが多い。そのため、個人の考えを大事にするため自分の好きなことができる機会がたくさんある。だが、日本ではみんなと一緒にという考え方がメインとしてあるため個人の意見を取り入れたり優先したりするわけではなく、同じような意見を持った人たちの考えが取り入れられている。
- 日本は、時間に几帳面で放課後にも最終下校のアナウンスがある。しかし、時間に囚われすぎているからか自由がなく、様々な場面で制限がされており楽しさが激減している。また、自己表現ができる機会がほとんどなく、校則では自分の思うような姿になることはできない。それに比べて、自国では校則に掣われることなく、自己表現をすることができる。几帳面ではないが、自分を出すことができ、楽しく過ごせている。

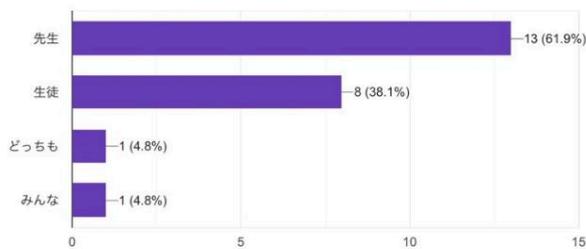
この結果をもとに、この学校では普段から校則改変についての意見がよく挙がる一方で、依然として変わる気配がない原因を仮説した。つまり、在校生や先生は校則の制限問題であると感じる意識が低いということだ。この仮説を元に、主に高校の在校生と教師を対象に、校則に対してどのような意識を持っているのかを調べるアンケートを行った。

その結果、様々な意見を得ることができたが、新たな課題が見つかった。それは、“全体のアンケート参加率の低さ”だ。同学年の3クラス(およそ120人)にアンケート回答を促した結果、実際に回答した人数は23人で19.2%となった。また、先生の解答率は(およそ50人中)にアンケート回答を促した結果、実際に回答した人数は9人で17%となった。アンケートの回答率から、アンケートの参加率が限りなく低いことがわかる。

さらに、先生と生徒の間で問題に対する捉え方が違うことや、問題解決に対する取り組みの低さという問題点が明らかになった。以下のグラフは生徒たちが主体的に取り組むべき人は誰なのかについてのアンケートの結果だ(資料1)。

【先生と回答→59.5% 生徒と回答→35.7% 両方と回答→4.8%】という結果だった。

このグラフから分かる通り、双方の問題であると考える人が少ないことがわかる。



資料1

そこで、次にそもそものこの課題について、学校全体で取り組もうとする意識をもっと高めていく必要があるという課題が浮き彫りになったことにより、私たちの活動はより、生徒と教師の意識改革を双方上げていく具体的な策に重きを置くようになった。その第一歩として、私たちはそれぞれ校則について、学校全体が考え直すきっかけになれるようなポスターを製作することにした。実際に完成したポスターはキャッチーさを重視したシンプルなものだった(資料2)。本格的に掲示するにあたり、学校から承認を得るためにある先生にポスターについてのアドバイスを頂いた。そこからわかったことは、これらのポスターでは何を意図し、どんな行動に繋げていくのかのビジョンが見えないということだ。

そこで、アドバイスを元に新たにポスターを作り直し掲示の許可を得るため再度先生に見せに行った。ポスターには、より私たちの目的がわかるように情報を増やし、そのポスターから今後の活動に繋げていくための質問が書かれたアンケートを貼り付けることで前回の改善点を修正した(資料3)。しかし、そのポスターも結果的に却下されることとなった。理由としては、やはりその意図が伝わりにくいことや将来性が見られないからなどだった。前記のように、アンケートから課題が発見でき、それに対して解決のために取り組んだとしても、許可を得ることができずこれ以上の成果は見られなかった。私たちは同時に、精一杯活動しても現実的な実行にあたって生徒の権限はあまりにも限られ過ぎているとも感じた。



上(資料2)



下(資料3)

4. 結論

私たちの探究活動はこの通りである。この探究活動を通じて、私たちの目指す「真のグローバルな学校」は実現することができなかった。その要因として、まずは私たちは探究テーマと通して実

現したい目標が明確でなかったということが挙げられる。実際に、具体的な策を取っていくにあたって生徒である私たちでは手を尽くすには限界があった。校則問題は、近年始まったことではない。長い期間をかけて議論され、グローバル化に伴い少しずつその変化が見られているというのが今の現状だ。その問題の本質は、社会全体にあるのではなくそこに関わる一人ひとりにあるのだということを、この探究を通して大きな視点で理解することができた。それは、ただ単に生徒だけに留まるのではなく教師側の問題でもあり、私たちは双方の理解を得ることの難しさを理解した。解決にあたり、私たちは実現できなかったが、一つの要因として生徒の活動範囲に制限があるという事が挙げられる。そのためにも、生徒と教師がお互いに良い信頼関係を作ろうとする意識が必要不可欠だ。

5. おわりに

この探究を通して、私たちは当たり前と思っていた校則や学校の仕組みを、多様性や自由の視点から見直すことができた。海外の教育に触れる中で、日本の学校は統一性を重んじる一方、個々の価値観を尊重する仕組みがまだ十分でないことを実感した。また、自由とは制限のないことではなく、自らの選択や行動に責任を持つことだと気づいた。さらに、グローバル化とは外国語や海外文化の理解にとどまらず、異なる価値観を持つ他者を尊重し、協力して生きる姿勢であることを学んだ。この視点は校則の在り方を考えるうえでも重要であり、学校という小さな社会の中でこそ多様性を受け入れる土台を育てる必要がある。今後は、与えられたルールにただ従うのではなく、その意義を考え、自らより良い形を模索する姿勢を大切にしたい。そして、他者を尊重しつつ自分の意見を発信できる力を育み、真のグローバル社会を築く一員として成長していきたい。

6. 参考文献・出典

朝日新聞、『「個性が失われているのでは」授業で研究した校則 メイクや私服を試しに解禁 心配する教員に取り組み説明 沖縄県立球陽高』, 新聞記事, 2024年2月,
[https://www.asahi.com/articles/ASS2P5T13S2PDIFI00C.html?utm_source=chatgpt.com\(2025\)](https://www.asahi.com/articles/ASS2P5T13S2PDIFI00C.html?utm_source=chatgpt.com(2025))